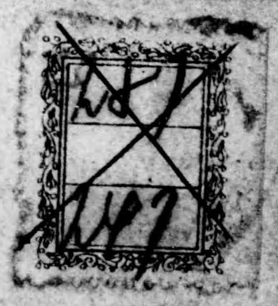
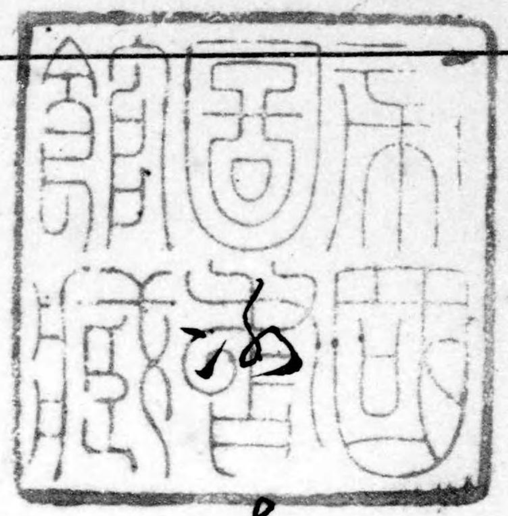
冰

海



始

特100
469



大正
8.8.29
内交

「氷海」は自分のこれまて前後十數年の間に作つた歌の中から拾ひ集めたものてある。かう纒めて見ると、隨分古いのも雜つて居り、不滿足なものもあるが、自分にはこれがわが歌の歴史てあり又過去の思出てもあるので、孰れも棄て難きものがある。茲に新裝して世に出す所以てある。

大正八年七月はじめ

佐瀬蘭舟

氷海

佐瀨蘭舟

秋はやし海邊の路のさるすべりさしもに暑
きわが脊廣かな

百日紅上枝(ほづえ)の花にあかあかと夕陽のこりぬ
さびしき日かな

わが屋根にたたくがごとき聲たてて朝鮮鳥
啼きにけらずや

小石とり空になぐれば白き羽をみせてたつ
なり朝鮮鳥

翅しろき朝鮮鳥たまさかにきたきたきたと
啼きのさびしも

いとどしく逢魔がごともなきさけぶ朝鮮烏
ききぞ欲りする

きたきたとわがうたたねの夢にさへかよひ
てさびし朝鮮烏

あさの日をさやかにうけて翅白の朝鮮烏な
きつつぞゆく

はりつめし氷の海をみるばかり北の果には
來つるものかな

すさまじく汐はかたふきとがりたつ氷の海
の眼にひらけたり

氷海のなかにあそべばはしきやしつるぎの
峰をゆくここちして

このあさき干潟の汐にうちあげし氷のうへ
の日のくもりかな

凍てさけし港のうちは冬ふかみ死のごとく
にも船はとざせり

海豹(あざらし)の背としも見えむたそがれて氷の海に
ひとりあゆめば

流氷のしろくただよひ西の風しきりにふけ
り春あさき海

あをあをと指のあひよりたちのぼる葉巻の
烟にながめいりしか

うすあまき葉巻の味の舌にしみかれし喉に
ながれ入るはも

ひとりあれば晝もおそれず出であそぶ二十
日鼠よわれもをどらむ

しづかなる浪のひびきにうちひたり紅茶を
すする朝のさむさよ

入江の面(おも)かすみそむれば三つ二つ石油タン
クも春めくものか

ぬりかへし綠の柵にまだあさき春のひかり
のただよへる路

うすあまき香はながるこの路の鈴懸の葉の
わかき芽生よ

青青とそよぐ並木のプラタナスの春にしあ
れば君とゆかまし

わが持てる杖のかしらに三月のあさのひか
りのうつつなきかな

やはらかきアカシヤの刺その刺ののびゆく
ままに春はあらじか

夕かけて潮みち來らし濱荻のあを葉をわたり風ふきのぼる

しめやかに水は小暗くたぶたぶとそこひもしれぬ夜の棧橋

ストーヴのしろきタイルにつめたくも月のひかりのさし入る夕

アカシヤの林の中にわがかげの青くおちなむ夏はたのしも

しめればか土のなかなる地の蟲もうごめき
そめむ靴のぬるみかな

河霧すかの電線のいくすぢのたえなむとす
る果敢なかりけり

さくさくと青き林檎の皮むきてかめばなつ
かし林檎のにほひ

かく經なむわが扃にも散る花のあはれをそ
ふる朝の風かな

松青しその葉をわたる三月のつゆけき朝の
風も身にしむ

ただ一つあえかに咲きぬ小田卷のむらさき
の花見つつわれあり

夕ぐれのかろきつかれかわりなくも毛なが
きあかき馬のあゆめり

涼風は海よりたちぬ蔦の葉のわかき緑のま
つはりし家

葦の芽のそろひて萠えぬたぶたぶと河波の
うつ春の岸かな

三月の青の木の芽もかぐはしき生命(いのち)のはえ
もかけてねがはず

はらはらと雨はそれともおとづれぬとこめ
づらなる人を見るがに

松青しこの一村のしづけさは蚊のまれにし
て海につづける

秋草ははや花つけぬいつしかに今年の夏も
去なむとはする

手ふれば猫の毛なみのやはらかに事なく
寝るもかなしや八月

なつかしく旭をまちぬ露しろくおきちらし
たる蓬のなかに

火を摺りてながき廊下のくらがりの御寺の
おくのわが室に入る

黄ばみたるポプラの並木黄ばみたる葉のは
かなくもちりぼひにけり

丈高きかの黄ばみたる四五本のポプラの枝
にふく秋の風

京も憂しポプラの幹にただよせて身のあり
ぬべきわれならなくに

みどりなるポプラの枝のそよめきの日もす
がらなり君をおもへり

そはポプラ君に見せばや河東葭間にたちて
黄ばめる樹々を

そよぐそよぐポプラの並木川ぞひの小暗き
なかに出でし月かな

萩の葉のしげりの上にほつほつと花さける
見ゆ秋は來ぬらし

今日もまた寢ねつつあれば枕邊の藥のかげ
に見るは小鼠

これやこの墓にも似たる病院のましろき床
によこたはるかな

病院の白きシーツは浄土なるましろきもの
におもひまがひつ

やる瀬なく蟲の音なけばわが墓にわが伏し
てきくさびしさのごと

われ逝きて幾世か經ぬる心地にも夜すがら
集(すだ)く鈴蟲の音よ

ちちと啼く千鳥をかしや川沿のおばしまに
凭りわが醉へるとき

いと甘き露ぞしのばゆ醉ざめの手にしながら
むる一粒の梨

なつかしき上總の山はいやひくく海のあな
たにうすがすむかな

埋立の三號地てふ砂原を歩めばさびし海の
香のする

東山月のひかりに齒朶(しだ)の葉のしげみをわけて夜をあそぶかな

夏の夜は町にそむきて山に入るうらさびしくもてらす月かな

さまよへるわれは獸か山に居てあゆめば齒朶のさらさらと鳴る

ほの白く山の薄に月させば夢にも似たるわが世なるかな

ものおもへばなべてはかなしなつかしし枕
手にちるわが涙かな

野の夕路にこぼるる蔓草の眞黑き實をば喰
べて死ぬべき

かなしげに雁のとぶなり一つらはいづれを
さしてなきわたるとや

年の瀨ははやせまり來ぬ古人のいふなるご
とき年の瀨は來ぬ

日々に夜にあそびすぐせばわが心おとろへ
はてぬかくて死なばや

わが失せし後の幾世も蟋蟀はひろき厨にな
きしきるらむ

ここかしこ夕はさむき風の來て野に伏すわ
れを吹きたつるかな

さびしさに窓の手摺もくれあひの空見てあ
れば涙ながるる

入海の底のにごりに似てしづむ日暮の街に
身をや投げなむ

風ありて葉蘭の青にはらめくこの夕ぐれ
のいかにさびしき

河鳥一羽下りゐて粗朶しづむ深泥のうへに
鳴きめぐるかな

さそはれてわれも行かばやかかる日の夕は
さびしチャルメラの鳴る

やうやうに青む槐の枝おろす日のしをらし

さ春のあはれさ

なにゆゑのさびしきいのち春はいまふたたびめぐり木の芽もえ出ぬ

とある朝春の雨ふる生垣のほとりに跳べる青蛙かな

地にいそぐうかばぬかげと夕ぐれの柳のかげとまじらひにけり

山山のすがたなつかしゆく春は日も世もあらで草の青める

月見草花のしをれぬさびしさは土龍(もぐら)の塚にひとりあゆめる

姫小松嬉曳の日は岡つづき蟬のかなしく啼きいでしかな

チャルメラの音のあやしくもかなしけれ別れて去ぬる薄暮(はくぼ)の路に

果しらぬ松の林に日のかげりかなかなの啼
く夕なりしかな

山蒜(やまひる)のそのうす苦き生白む根などぬかれて
散らばりにけれ

酔ひしれて酒のいぶきに仆れふすかなしき
われをおもひみるかな

あな黄なる菌(くさびら)もえぬ鴆毒のこころよき香の
たちめぐりつつ

毒草の黄なる花つみわれあらむただうつろ
ひし春の山邊に

王屈菜(くさのわう)垣根にすこし咲きそふをとれば毒あ
る香ぞたちにける

南(みんなみ)に犀の喰むなるしびれ草の丈にもあまる
澤のありとか

びいどろの鏡のうらの水銀(みづがね)に毒ありとしる
をさなかりし日

杏仁(あんず)の葉なにかはしらね五月蠅(さばへ)らのたのし

げにあるさまをながめぬ

うつむけばあはれなつかしわが影のさびし

く立てり野のたまり水

初夏の山の日向に斑猫のしきりにとびぬわ

れもあそばむ

砂山の木瓜ぞみじかきぞこばくは砂にうも

れて青くみのれる

夕ぐれの風さわやかに吹きくればあるかひ
もなく野の家を出づ

水無月の疏水のへりのくさむらの青きをい
でてとぶ螢かな

戸にたてば麥の穗をやく野のけぶりあをく
にほひてたそがれにけり

岡崎は雨ふれる日もふらぬ日も柳の色にし
ぐれぬるかな

わが髪の間なくこぼるれそこはかと松の木
の葉のちるがごとくに

きりぎりす啼くや大角豆の一むらのうすむ
らさきの莢ながき畠

初夏のまだらなる日の來てはあそぶ露臺の
上のアカシヤの花

眞白地のいよいよ夏も近づけば柳のかげを
人のゆくなり

松の葉の嵐のなかに海ちかきしらべをつたへ夏は來にけり

遠白む東に來れば出づる日も故郷ちかくなりにけらしな

東京の朝のちまたに青草の唐辛賣のすずしあへなし

よそに居て蟬の音きくも弟よ七夕ごろのなつかしきかな

若竹の葉はしなえたり歌そめし七夕の日も
すぎぬはなれぬ

蟬の音は精靈(しやうりやう)の日もややはてし秋のあつさ
に啼きしきるかな

わが袖は緣日の夜秋草のはかなき花の露に
そむかな

降りやまぬ雨のたえまに啼く蟬の聲はばか
るもかなしからずや

なつかしき火山の湖に山梨の花ましろなる
島はかかりぬ

わが吐ける齒磨の粉のうすべにの含嗽(うがひ)のさ
きにつづく海原

白鷺の月にとぶなり七月のみじか夜なれば
空やあけぬらむ

楢の葉のわかき緑にしとしとと五月のひか
りふりそそぐかな

葉ぞしげり梅のさ青になる日さへさむさを
おぼえ五月雨のふる

なほかくて竈のけぶり雨の日は母屋の藁屋
にたちまよふかな

なつかしき人の面に初夏の青葉のかげのて
りそふる家

蟬の音のうひうひしくも啼きいづる木の間
にありてうらわかき日よ

松の木のあらき膚に聲ありて啼くとぞおも
ふはじめての蟬

磯樒なほくすなほにはひめぐる眞砂の上を
ふみて來しかな

白けたる幹のならべり島かげの椿の下に水
くむ少女

巣だちにし目白のむれの幾胞のうら安げな
る大島椿

すてられし牛乳(ミルク)の罐の色摺のつめたくぬれ
てまろびぬるかな

洗場に米とぐ白きとぎ水のながれていでぬ
花あやめ草

磯の家の海の汐さし生ぬるむ水くみあげて
炊ぐ夕ぐれ

磯くさき廓のうらの石垣のくづれにはしる
船蟲のあり

ここちよき麥酒(ビール)のなごりうたた寢の胸すく
ときぞ山杜鵑

京の日はオールゴールのひびきより杜鵑よ
り夜あけぬるかな

ほのぼのと山の端にひくほそ雲のしろきが
なかに啼く杜鵑

ひらけたる樟の若葉に大西の風しばらくも
吹きやまぬかな

仁和寺の山のつつじのかげゆけばわが眼に
しげく小き蟲とぶ

砂ふかき御室の寺は松かげのつつじ咲くな
りうすむらさきに

罎詰の酒のむさへもおもしろし木の間に白
く山櫻ちる

きしきしと髪切蟲の節節のさびしくぞ鳴る
わが枕邊に

青木の葉ゆれてうごけばさらさらと冬の雪
こそちりこぼれたれ

黄ばみてぞ冬の山路におちちれる蜜柑の皮
もなつかしきかな

蠣の灰かなしきまでにふりつめる屋根まし
ろにぞ月のてらせる

栗の葉は新年しらず蓬々とかれたるままに
一月に入る

かくばかり久にはなれし父母は御墓の中と
おもふ日のあり

芍藥のうす紅き芽の三莖ほど庭にもえでぬ
春あさき日に

皿などの食器をあらふ物の音しめやかにし
て夜ぞ更けにける

三月の山城の野は白雪のふれるがごとく梅
さきにけり

形ばかり青き芽をもつやせ蔓の垣よりたれ
し春の夕ぐれ

あたらしき白木の家の建ちつづく京の東に
三年へにけり

牛乳（ミルク）など溶きしやうなる藥湯のしろきに浸（つ）
かりものをはかなむ

黑ずめる溷のぬるみにあひ棲むや生あるも
ののあはれなるかな

濤のまにゆられぬ伏しぬかかるとき汝(な)が一
族(ぞう)となりもはてなば

沖の石遠き島わにしらしらと浪うちよせて
今日もあるかな

紅百合の花いたましや磯にさく暑き夕の戸
に立つころを

馬追かやさしき蟲の戸にまゐりきつきつと
して晝もなくかな

刈られたる柳の枝のうづたかくちらばる見
れば秋はさびしき

一本(もと)の公孫樹の木の葉ふりつみてあはれな
る日のかつつづきけり

おほいなる幹のまはりに銀杏(ぎんなん)はおびただし
くもこぼれぬるかな

青ざめし若木いてふもいろづきて秋風さむ
くなりにけるかな

秋の日のひかりつめたくさやさやとアカシヤの葉に風わたるなり

コスモスはみだれて伏しぬ秋風の遠き空よりふきも來ぬれば

夕ざれし槭（かへで）などにやよわよわとうすきひかりをみちびきにけり

杉の葉は赭くいろづき寒げなる夕ぐれどきのあかるみに立つ

いたましく霜おくままに菁莪の葉は萎え青
だみてくづれけらしな

無花果の熟れ實に朝の雨すぎしおもひに似
るや戀ざめごころ

ほのうかぶ菱の葉にふる夕雨のしろきを見
れば夏ふかみかも

夏の夜の障子の外に蟲とぶを雨來にけりと
おもふわびしさ

野に山に春は來にけりなつかしくまたかな
しくもわれは古りゆく

山の雪とけやそむらし葭芽(あしかび)の白きをこえて
水ながれくる

春あさき川ぞひ柳君も見よ小雨に似たる絲
たれにけり

こぼれてぞ數かぎりなき紅の椿の花もなく
なりにけれ

春の水根にやさすらむ野漆のうからは黄な
る花のまがひに

薄などいたづらごとのやうにある野山をめ
ぐりそよぐ風かな

御佛の國とおもひぬ舟うけて出水の中に見
る曼珠沙華

秋の野の草のなかなる曼珠沙華もえたつば
かり咲きいでにけり

曼珠沙華いとあからかに野に山に咲きてあ
るなり戀しき君よ

花しろき島の椿の油もて君と焚られむ期に
しもあはば

まどろめば夢はいたくぞ荒れまさる山菅そ
よぐ島のけしきに

白つつじはづかに咲きて青みたる葉のそだ
ちゆく山の上かな

若むらさき藤のながきがたれて咲く雨ふり
そぼつ夏のはじめに

山の石しろくくづれて藤かかる頂にしも春
の風ふく

大石のまろびて造れるふる雨の笠置の山に
かかる白藤

さびしくも明き障子の三つばかり小暮れし
水にかげうつすかな

赤土の吉田の山の雨の日は根こそながれめ
花つつじさく

あやめ草しろくにほひぬ靄かかる御生(みあれ)の山
のふもとの池に

比叡のねにうす白雪のありなしもあかずか
すみて見えわたるかな

朝々は比叡の御山にうす雪のしらむをなが
め戸をくりにけり

牛羊はなれし野邊にしら雲のいゆくをなが
め海をおもはず

金剛も夜叉もならびてものものし手力うつ
や山に雨ふる

河骨の一花莖に黄をおきぬとばかりたたむ
夏は來にけり

ものねだり裾ついばめる白き鷺のうとまれ
てあるをかしき容

むしあつき夜を傘たまへ黒谷のあたりめぐらむ啼くほととぎす

四手櫻しろくにほひてあみ竹のかごの戸しぶく山の雨かな

逢坂の關屋こゆれば朝がすみころもがへしぬ夜行の汽車に

小簾(をす)まけばかはゆきものや紅白の有平糖はこぼれてありぬ

丁々と椿もたふせほのぐらき歌の中山あめ
ふれる日は

一種(くさ)の青くだものをもてまゐる小厨(こもの)にやら
む午睡(ひるい)の團扇

庭砂にしばし梨地のあととめてすぎゆく雨
のおとかぐはしき

蓬生のそよげるなかを袖ふかせ颯爽として
月夜の風に

あらけなく物のすがたのみにくさのありあ
りとある眞晝なりけれ

喘ぎつついりかふ汽車のうきさけび煤とぶ
中に今日もくれけり

月を見て靜(しづ)にながるるわがなみだ何ゆゑと
しもいみじきものに

五月雨やうき名とめにしぬり込の壁ははだ
らにくづれぬるかな

吹きおこすあやめの風のすずしさに君は裁
つらむ初夏の衣

ふるさとの磯の砂地の貝塚に濱茄子そよぐ
日をおもひけり

菁莪らしき花など見ゆる草中にしろき馬あ
り春風のふく

野につめる草なげやりやれな馬の子はやさしき
顔に物はむといふ

しめやかに物こそまゐれ夕さりは河の面し
ろく千鳥なくなり

海豚(いるか)など物の怪(けい)あそぶ南國の大わだつみの
晝しおもひぬ

世もわかずけぶりに似たる白き花さくをあ
はれみ春の日ありぬ

いと白き牡丹つくりぬ何國か夢うる春の家
のあなたに

戀ふればか夢のなかなるかたし貝夜ごと匂
ひて晝はうせけり

うす月は十日あまりよ枳殻の黄なる實つみ
つ母まちてけり

夕風や野ふかき草の家にして撫子ふくをあ
はれとぞ見る

いたはれば長きみじかき今様のすがたにつ
ぼむ花あやめかな

夏草やわすられし日もありなしのおくに棲
むなり萱草の花

雨來る三春は見えず馬の尾に撫子さわぐ西
東かな

世づかざる春の白魚と海草の芽ぐめるほど
の戀おぼえけれ

ひろびろと黄なる花もつ山石蕗(やまつはぶき)の世さかる
野にもうき雲の來て

ささやかにあり經むほどはむらさきの夏さく花にきえもまぎれむ

汐くれば捕られじとするわが足のつめたき底の砂ながす海

八重葎母屋より見れば山吹のあなたにひくき春の山かな

橘や風をよろこぶ幾人の少女は京の絹おりにけれ

錦魚賣すずしき聲によぶ朝はいでてぞ見ま
し京の圓山

小倉山御堂の縁の下かけていまもにほへる
かきつばたかな

岡崎や萩さく中に籌して蟲きく夜半となり
にけらしな

若草の奈良の箔屋が小蔀をおろせる軒に春
の雪つむ

稗酒は瓦してくめ野守らが蜂兒（すがれ）まゐると草

野の家に

山々につつじ花さきあけがたの雲のやうな

る皐月となりぬ

ふるさとの家の南の花柑子にほひおこさむ

夏は來にけり

黄なる花河骨よりや吹きいでし風なつかし

き里の舟かな

市住の日はやせやせて晝顔にふるさとおも
ふ夏の雨かな

寸ばかり鹿尾菜のびたるひたひたの中に舟
しぬ初夏の潮

菁莪の花雲居るやうも初夏の山に匂ひぬう
すむらさきに

あやめ草厨の屋根にひらひらと花かへりさ
くうすけぶりかな

蔦さく花野は紅のありあけに馬千匹みる春

雨の市

舟やれば河原の草も野の花も山家は春のながしみじかし

豆の花あからにからむませ垣をへだてて君は繭ひきにけり

春の夜の夢はうるはし立琴に桐の花さく青畳かな

春の風草花ふいて山ふいて會津にわかき青

駒の旅

草長う路白河の花あざみをんな行脚に春の

靄する

白河にふりし春風花すぎて若駒づれの女馬

子ふく

白つつじ夜もしらしらのかげとめて御料の

乳をいままゐらする

朝雨や公孫樹におりし金風の小撥ふるひて
千人し去にぬ

世の秋をひとりあつめていてふ葉の風にま
かせし金の小扇

あづま女も利久も宇治の夜あけ舟河水たて
て茶ぞくみにける

冬枯の梨の木原や梨の穂のひまむらさきに
富士あけにけり

窓の灯は紅玉なれや玉磨の家並につづく春
の夜の雨

夕ぐれのとすればいそぐほそ徑を葛花蔓に
足とられけり

この雨の葉月に入らば眞萩さく裏のあれ野
に盥うかべむ

撰集の枕さそひて吹く風に青水無月のゆめ
ながれたり

垂氷する三室の春や桃色の蕊の蒲團に歌そめてまし

春の緣草紙ひらけば朝かぜは軒の葛の露にぬれ來し

山吹の小さき折戸に蛾を飼ひて種紙つくる更科の里

菜の花に千鳥なく夜の如月(きさらぎ)はさむげに戸しぬ川沿の家

君がのる丹ぬりの舟のあえかさに供奉(ぐぶ)して

まゐれ白蓮の花（以下二首亡弟利幸を偲びて）

南天の珠數まく稚兒にさまされて丁子見に

來しおくつきどころ

夏野ゆけば砂川かれて目のかぎり紅の波よ

る晝顏の花

無花果の若やぐ枝におのづから乳こそめぐ

れ甘き實の生る

落葉松(からまつ)や山毛欅(ぶな)に直黄(ひたき)のみねいく重(へ)みなみへ落つる秋わたり鳥

夕ぐれは姫ひまはりぞいたいけの金の小手毬星にあづけぬ

東風ふけば木槿にからむ晝顔の花のとぎれによき長良川

ふるさとや蝗(いなご)のむれに秋の日の黄ばみがちなる野をあゆみけり

あけぼのの夢に花もつ烏瓜ほのかにさやに
人は知らじな

むら薄なかに花もつ萱草のあかく匂はむ日
をおもひけり

春の夜は汝(な)が落髪に柱(ぢ)をおきて彈かばとお
もふ一絃琴や

海月(くらげ)うく島のうす日やあみ蔓の帆舟ゆらら
による春の波

陸奥(みちのく)は葱の軒居ふるもやの脊(せな)さみどりに菅
笠あむも

黄の花は眉にかかりぬ乳賣の丈ばかりなる
金雀枝(えにしだ)の村

春の來て夢やはらぎし蔓草は垣にも戸にも
花ふくみけり

梨の花朝の戸くればほのじろき上に山みる
春の家かな

冬磯は花のやうなる紅の正木の實に啼く晝

千鳥

夢の世はいとひろやかにけぶれるをあかでも君とあひなれにけり

朝夕に霧が育くむ露草の屋根とし屋根に秋の蟲なく

夕されば尾腰のもやのほのぼのと鳶尾ばかり屋にうかぶ村

水盤に水くむ君がしらぎぬの裾にたもとに
紅鳳仙花

ぎやまんの酒の香をもる蠅捕とならびてそ
よぐ夏の花かな

ながれ藻のながれのままに花さきぬいづく
を果の春の野の水

平陽の任もなごりの芥子畑に白馬つなぐ朝
がすみかな

澤潟(おもだか)のしろくほのかに花さくや汽車よりお
りし夏の家路に

あけ月や紐雞頭の穂のつゆに十壺(こ)の紅はし
ぼりてましを

待宵の花さく中に笛とりてそよめきいでし
夏の夕月

高瀬川ややあつき日は曳舟のをとこもさし
ぬ京の繪日傘

—了—

大正八年七月二十七日印刷
大正八年九月一日發行

◀海　氷▶

（定價八拾五錢）

著作者　佐瀨武雄

發行者　東京市牛込區矢來町三番地　金子雄太郎

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十九番地　丹羽誠次郎

印刷所　東京市神田區錦町三丁目十九番地　忠義堂印刷所

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　短歌研究會

本會既刊三歌集

■岡橙里全集　岡橙里遺著

——羽二重表紙特製美本定價八拾五錢郵稅六錢——

■流れ　森繁夫著

——裝幀在田稠氏中版美本定價五拾錢郵稅六錢——

■水平線　山田露禾著

——裝幀挿畫著者中版美本定價八拾五錢郵六錢——

281
147

終